

文化的キリスト教から社会的キリスト教へ

——米澤尚三の思想的展開——

笠原芳光

序

明治の文明に対して大正の文化ということがいわれる。明治時代がもっぱら精神と技術の両様にわたる西洋文明の性急な摂取であったのに比して、大正時代はそれをゆるやかに醸成して民衆における大衆文化、知識人における教養主義を産みだしたところに特色があった。明治の文明が粗削りで新鮮であったのに較べて、大正の文化は細分化され、定着したものになったといえよう。

キリスト教についても、そのことは当てはまる。明治維新の九年前に渡来したプロテスタンティズムは欧米の新思想、文明開化の精神として受容された。それは狭義の宗教や信仰にとどまらず、倫理、哲学、社会思想、文学、芸術にわたるものであった。やがてプロテスタント各派の教会、学校、団体が多数つくられ、信徒も伝道者も増加し、教義や神学が整えられるに従って、キリスト教は当初の不定型な精神文明の姿を脱して、しだいに文化形態の一つであ

る宗教として形成されるに至った。

明治初期には農民層にも浸透したけれど、都市化の進展に伴って中産階級、知識層に偏るようになり、そのことがキリスト教の文化的、教養的性格を強めた。明治時代には井上哲次郎のような代表的哲学者に対決する内村鑑三、植村正久、大西祝ら一群のキリスト教思想家があり、北村透谷をはじめ多数の文学者の入信という事態もあったが、大正期の思想界をリードした夏目漱石門下や西田幾多郎らはキリスト教にかかわりを持たず、白樺派の文人たちも有島武郎を除いてはキリスト者ではなかった。大正時代の文化的キリスト教は巨大な指導者による重厚、鮮烈な思想ではなく穏和、健全な思想であり、市民階級や都市生活者にアピールする適度の知性と感性を含んだものであった。

明治時代のキリスト教は社会主義とも密接な関係があった。社会主義を初期に紹介したのが小崎弘道やラーネッドであり、安部磯雄、山川均、片山潜、荒畑寒村、大杉榮、石川三四郎といった代表的な社会主義者はすべてキリスト教から入っていた人々である。明治末年の大逆事件以後を「冬の時代」というように直接的な社会主義の運動はひとたび断ち切られる。しかし大正という相対的な平和と安定の時代にも米騒動、関東大震災、農民運動、労働争議、娼娼活動、個人では賀川豊彦らの活躍を通して社会的関心は徐々に高まっていった。そして昭和のファシズムを前にして社会主義の思想と運動は盛り上がり、やがて大弾圧を受けるに至る。

キリスト教の神学思想の推移をみても初期のピュリタニズムから、一方では日本基督教会を中心とした正統主義、他方では日本組合基督教会を主流とした自由主義がおこる。とくに自由主義的なキリスト教は聖書の歴史的批判的研究と相俟って新神学やユニテリアニズムへの傾斜を産み、そこまで行かなくとも、おおむね文化的傾向や社会的関心を増大させていった。

明治年間に創立されたキリスト教主義学校には女学校が多く、大正期には生徒数も増加し、時代思潮であった婦人の解放、権利拡張にも資するところが大きであった。また教会の日曜学校や幼稚園も盛んになり、子供の存在とその教育の重要性を啓蒙するのに力があつた。

以上は大正年間を中心にした明治末年から昭和初期にかけてのキリスト教の特色の概観である。本論においてのペル米澤尚三よしむねの思想の展開はまさにこのような時代の変遷に見合うものといえよう。米澤が所属した教派はリベラルな日本組合基督教教会であり、大正年間を通して牧したのは大都市の古く、大きな教会である日本組合神戸基督教教会である。近くに教派を同じくする神戸女学院があつて、米澤はその学校の理事をつとめ、生徒や教職員の多くは神戸教会の礼拝に参加し、また教会では日曜学校や聖歌隊もさかんであつた。このようなところから米澤を大正時代のキリスト者の一典型といつてもよい。

米澤は同時代には教会においても、教派においても、また地域社会でも有数、有力な存在であつた。にもかかわらず今日その名を知る人は少く、論評も死去の際にキリスト教界紙に載つた数篇を除いては皆無といつてよい。しかし米澤自身が執筆した文章はかなり多数のものが残っており、その大部分は米澤が十八年間牧師を勤めた日本組合神戸基督教教会の『神戸教会月報』と十六年間理事の職にあつた日本組合基督教教会の週刊の機関紙『基督教世界』への寄稿である。その他に神戸教会辞任後、東京で指導した労働教会の月刊の機関紙『労働教会会報』に掲載された短文があり、その抜萃を中心にした『勝利の声——米澤尚三遺稿集』もある。さらに神戸教会辞任後に刊行した著書『無産者イエス』とダン・ポウリングの著書の翻訳『渦巻く波止場』がある。また『大阪講壇』のようなキリスト教界誌や後述することく『大阪毎日新聞』のような一般紙に執筆したものも若干あることが確認されている。

これだけの資料に抛り、また現存する遺族や知友からの聴取を行えばかなり詳細な論を書くことができるはずである。ここではとりあえず米澤自身の文章を中心に、とくにその思想的展開に焦点を当てて考えてみたい。

時代や状況によっても渝らないものがキリスト教であり、福音であるという考えがある。しかし、それを信ずる者が人間であるからには信仰の理解は時代や状況に応じ、あるいは逆らって変化し、発展するのが当然であろう。渝らざるものがあるものとしてあらわされるところに信仰の逆説があるといってもよい。問題はその展開がどのようになされたかというところにある。米澤の思想が今日からみて全体的にきわめてすぐれていたとはいえないだろう。しかし時代の尖端をきわめようとする感覚を持ち、つねに新しい思想を撰取しつつ、根源的な思考を忘れなかったことは評価しうるところが少なくない。

そのことは米澤の追悼特集である、『基督教世界』の昭和十一年（一九三六年）五月二一日号に載った、大正九年（一九〇年）から一三年（一九二四年）まで神戸教会の伝道師を勤めた西内藤男の「米澤先生の思ひ出」によくあらわれている。その一節に「米澤先生の教壇の力は実際偉大なものでした。新しい時代が産んだ教壇の勇将でありました。説教の内にも新しい幻があり、聖書の解説もいつも新鮮さをもち時には詩的で時には文学的で仲々叙述の妙をきかめてゐました」とある。また同じく大正一三年から一五年（一九二六年）まで伝道師であった中村三郎も同特集に「米澤先生のごども」を寄せて「講壇に於ても極めて人情的な自由主義的な色彩が説教の中を流れてゐるたかに思ひ返す。神戸教会を去られた事は米国で知った。先生は努力の人であつた。頭脳明晰な英雄型の人であつた」と語っている。

米澤の生涯は大別して三期に分かれる。第一期は日本組合京城基督教會牧師までの時代、第二期は日本組合神戸基督教會牧師の時代、第三は神戸での著述を主とした活動と東京における労働教會の時代である。米澤のキリスト教

思想は一貫して広義の自由主義であつたといえるが、それぞれの時期によってニュアンスが異なり、特色があつた。第一期はやや正統的、第二期は文化的から社会的へ、第三期は社会的から正統的へ、ということになるだろう。このうち第二期に当る明治四四年（一九一一年）九月から昭和三年（一九二八年）二月までと、第三期のうちの東京までのおよそ二十年間が米澤の思想のもっとも躍動した時代といつてよい。それは米澤個人の歴史からいえば得意と失意、栄光と挫折であつただろうが、思想的には発展として評価しうる時代である。キリスト教正統主義の観点はむしろ晩年、労働教会時代の伝統的信仰をよしとするだろうが、内容の思想性を問題にするなら衰退といわざるを得ない。もとより思想変転のドラマとして見るとき、晩年の心境も逸してはならないだろう。ここでは重点をさきにのべたように神戸教会牧師と以後の神戸在住の時代において考察してみたい。

「文化的キリスト教から社会的キリスト教へ」という本稿の表題は、この時期における米澤の思想的展開を示す言葉である。ここにいう「文化的キリスト教」とは文化一般すなわち哲学倫理、社会思想、文学芸術などと積極的にかかわるキリスト教である。それは正統主義、福音主義、教会主義のキリスト教のように純粹に、あるいは偏狭に信仰を理解し、文化を排除、またはそれと一線を画するという立場ではなく、キリスト教思想としては広義の自由主義の立場といつてよいだろう。また「社会的キリスト教」とは社会問題や社会思想や社会主義にかかわるキリスト教であり、広く社会的関心の強いキリスト教をいうが、そのなかには、マルクス主義と対立することを主張するキリスト教社会主義の立場もあれば、マルクス主義と協調ないし両立を唱える立場も含まれる。

「文化的キリスト教から社会的キリスト教へ」という表現は前者を否定して後者に転じたという意味ではなく、前者から後者へと特徴点が移動したことを示す。米澤は基本的には自由主義的キリスト教であり、そこに文化的要素が

加わり、さらにその上に社会的傾向が強くなったということである。ともあれ、それはそのまま、この時代のキリスト教の特色をあらわしている。そこに米澤の面目があった。

- (1) 米澤の名の「尚三」は『神戸教会月報』にも『基督教世界』にも「しやうざう」と旧仮名を振ってある箇所があるが『基督教世界』に「N・Y生」という表記があり、長男の理一氏に尋ねたところ「なござう」が正しいとのことであった。
- (2) 明治三二年（一八九九年）一〇月創刊。発行所は教会月報社（日本組合神戸基督教会内）。表題は『教会月報』となっている号のほうが、多いが、ここでは『神戸教会月報』に統一する。
- (3) 明治三十六年（一九〇三年）一月創刊の週刊紙。発行所は基督教世界社。
- (4) 昭和九年（一九三四年）九月に創刊された謄写印刷の月刊紙。発行所は労働教会。のち『労働教会報』、そして米澤の死後『おとづれ』と改題されたが、ここでは『労働教会会報』に統一する。
- (5) 昭和一三年（一九三八年）五月、労働教会発行。
- (6) 昭和三年（一九二八年）九月、春秋社発行。
- (7) 昭和七年（一九三二年）一月、警醒社発行。
- (8) 明治三三年（一九〇〇年）一〇月創刊の月刊誌。発行所は大坂講壇社（日本組合大坂基督教会内）。大正四年（一九一五年）一〇月号に米澤尚三「原始教会の役員選挙」が載っている。

一

米澤の生涯のうち、第一期に関しては資料が乏しいため判明している部分は少い。『基督教世界』の昭和一一年（一九三六年）五月一四日号と二一日号、『人道』の同年六月号、『おとづれ』の同年八月号における追悼記事や略歴を綜合し、それに米澤の四女で昭和五二年（一九七七年）九月に亡くなった渡邊勝子氏所蔵の米澤自筆の「履歴書」

と「信仰之告白」⁽¹³⁾をあわせて参照、略述しておく。

米澤尚三は明治九年（一八七六年）一月二日、滋賀県蒲生郡八幡町大字為心町中一九番地において暈表商米澤彌兵衛の長男として生まれた。前記「信仰之告白」は「予が信仰の経歴」と「予が信仰の内容」に分かれており、冒頭はつぎのようである。

「予は幼より涙の家庭に人となれり、父の心を改めしめ母を悲惨のうちより救ひ出さんとの情願は幼心に充ち、念仏合掌を軽蔑せし予も、之が為めと屢々家を出で湖畔の山に登りて神仏に祈れど、山は豊臣秀次の城跡、雄図一蹶何の残る処ぞ、此世の国を追ふ者は皆如斯、唯空を攫むの感に堪へざらしむ。洋々たる琵琶の湖、白皚々たる比良の秀峰、遥に見ゆる小河村聖者の跡、之れ予に無限の美と無限の善を慕はしむる恩謝なりき。家にありては人生の涙を学び、世に接しては江州商人の感化を受けし予は山に於てはより高き人生を啓示せられたり」

このあと明治二年（一八八九年）の春、数え年一四歳で小学校準教員在職中、宮川經輝の「基督教演説」を聴いて感動し、牧師村田平三郎を訪ねたとある。やがて湖畔の山で祈った神仏はキリストに現わされた「天父」であったと了解し、翌年一月、牧師古木虎三郎から洗礼を受けた、同年四月、滋賀県立師範学校に入学したが、同校は「教育と宗教の衝突論争」に発する国粹主義の傾向が強く、注意人物視された。舎監によって所有物を検査され、聖書、讚美歌、デビス著『基督教之基本』を押収され、棄教を勧められたが応じなかったため、明治二五年（一八九二年）夏に退学させられた。「信仰之告白」には「二十六年の夏より三十年の夏迄京都同志社に学び」とあるが、「履歴書」には「明治二十七年九月ヨリ同三十一年六月マデ京都同志社神学校ニ学ブ」となっている。「同志社大学神学部卒業生名簿」⁽¹⁴⁾では明治三〇年の前後に米澤の名は本科にも別科にも見当たらないから卒業はしなかったと考えられる。前記

『基督教世界』の追悼特集中、米澤の同志社神学校での同級生山口金作の「故米澤尚三君を追悼す」に「同志社にては別科神学にて二ヶ年、其他ラーネット氏等について別に一ヶ年、三ヶ年勉強せられたのであるが、此三ヶ年間非常によく勉強せられて、英語其他の基礎的学科を修得せられた。其後学校をやめて、湯村に津山に、又福井に伝道せられた」とあるのも、それを裏付けている。

同志社中退後、兵庫東美方郡湯村で伝道を始め、翌明治三十一年（一八九八年）二月一日に鳥取市元奥町の織田敬三郎の長女ます子と結婚、翌年、日本組合津山基督教会の主伝伝道師となり、かたわら津山女学校で教壇に立った。明治三四年（一九〇一年）、日本組合福井基督教会に招聘され、明治四〇年（一九〇七年）四月一七日に組合教会の按手札を受け牧師となった。明治四二年（一九〇九年）九月、日本組合京城基督教会牧師に就任、明治四四年（一九一一年）九月、まで在職した。

以上が米澤の前史ともいふべき部分である。その間におけるキリスト教思想については「信仰之告白」の「予が信仰の内容」以外に公表されたものが見当たらないので、これを要約しておこう。「神、基督、聖霊、三位一体、聖書、教会」の六項目に分かれ、神については自らを啓示する人格的存在であり、その神の影像がイエスキリストに顕われているという。キリストについては神の啓示であるとともに人類の理想であり、その十字架の死は贖罪のためであるが、復活は旧い体のよみがえりではなく霊的な問題であるとする。聖霊については神聖と道徳的完成を造出する神、人々をキリストと化成させる霊であるという。三位一体については独一の神の天地創造、キリストにおける人類救済、聖霊による靈化の三方面への顕現であるとする。聖書については神の摂理、キリストの救済を教える書であるが無謬ではなく、歴史的批評によってかえって明かになるところもあるとし、文学的、道徳的、そしてなによりも霊的

価値を有するという。教会についてはプロテスタント教会もまた異端征伐、他派排斥など恥辱の歴史を有しているが、組合教会に生まれ育った者としてこの教会に確信を持っており、それはキリストを中心にした新社会、新家庭を組織して全世界に及ぼさんとするものであるとしている。

さきに米澤の第一期の思想的特色を「広義の自由主義」で「やや正統的」としたが、復活において体のよみがえりよりも霊のそれを強調していることや、聖書は無謬ではなく歴史的批評によってかえって真理が明らかになるとしてある点や、教会にも過誤の歴史があり、またあるべき教会を一つの新しい社会と考えているところなどに自由主義的傾向があらわれている。それは米澤自身も触れているように組合教会の特色を示すものといえよう。

この第一期の終りの三年間、米澤は京城教会の牧師であった。その時代の思想については資料の有無も不明であるが、朝鮮という当時の植民地における伝道をどのように考えていたかは、後年の社会的な傾向に照らして興味のあるところである。

およそ明治後期から大正にかけて、プロテスタント各派のうち朝鮮伝道をもっとも熱心に推進したのは組合教会である。組合教会は明治三六年（一九〇三年）一〇月の第十回総会において朝鮮伝道の決議を行い、翌年から伝道を始めたが、日露戦争のため頓座し、京城に教会堂が新築されたのは明治四四年（一九一一年）であり、米澤の在職中と思われる。その間に明治四三年（一九一〇年）八月に日本の韓国併合が行なわれ、朝鮮総督府が設置されたから、米澤は政治的に緊迫した状況を体験しているはずである。米澤の朝鮮観を示すものとして、のち大正六年（一九一七年）五月から六月にかけて朝鮮に伝道旅行をした感想が『神戸教会月報』の同年七月号所収の「半島の新日本」と題する説教のなかにのべられている。それによると五年半ぶりに朝鮮を訪れて目につくのは半島の自然に緑が増え、また道

路や鉄道が整備されたことであり、「新同胞」の容貌に生気があらわれてきたことであるとし、しかし遺憾なことは朝鮮の「内地人」が遊廓を作るなど精神性を欠いていることであるといっている。

組合教会の朝鮮伝道は当初の在鮮日本人を対象としたものから、明治四四年（一九一一年）にそれまで神戸教会牧師であった渡瀬常吉が米澤と入れ替る形で京城教会に赴任した後は対朝鮮人伝道に重点が置かれ、キリスト教化とともに日本臣民化が図られた。とくに朝鮮総督府から多額の機密費を受けとっていたところから、組合教会内部で問題となり、湯淺治郎、柏木義圓、吉野作造は反対を唱えた、やがて大正八年（一九一九年）三月の三・一朝鮮独立運動などをへて朝鮮伝道は瓦壊していく。米澤はこれらの問題について言及していないが、いささかの批判精神をこめたさきの旅行の所感から推測して渡瀬とはある程度、違った考えを持っていたと推測される。

(9) 明治三八年（一九〇五年）五月創刊、発行所は人道社。

(10) 昭和一年（一九三六年）八月創刊、発行所は労働教会（『労働教会会報』『労働教会報』の改題）。

(11) 神戸教会辞任直後に執筆したもの。

(12) 明治四〇年（一九〇七年）七月、組合教会の按手礼を受ける際に提出されたもの、あるいはその草稿と考えられる。

(13) 昭和四三年（一九六八年）八月、同志社大学神学部発行。

(14) 湯淺與三著『基督にある自由を求めて——日本組合基督教会史』昭和三三年（一九五八年）二月、私家版、三三七—三二八ページ。

二

米澤の第二期は神戸教会時代であり、「文化的キリスト教から社会的キリスト教へ」というテーマに即した時期と

して重要であるので、大正一〇年（一九二二年）の外遊までと、以後の二期に分けて、その思想の展開を考察したい。米澤が家族とともに神戸教会に着任したのは明治四四年（一九一一年）九月二十七日であった。ここで家族の氏名をあげておくと妻ます子、長女尚美（のち馬場姓）、次女田鶴（のち井伊姓）、三女幸恵（のち林姓）、四女勝子（のち渡邊姓）長男理一、五女道子（のち小林姓）であり、五女は神戸教会着任直後に誕生した。教会での最初の礼拝説教は同年一〇月一日であり、題は「無名の聖徒」であった。¹⁵

『神戸教会月報』に米澤の説教が掲載された最初は同年十一月号であり、以後ほとんど毎月、月報の巻頭を飾るところになる。現在、確認されているところでは、米澤の活字となった文章として最初のものである、この説教「人生の茅廬」はホセア書一二章九節をテキストにしている。イスラエル民族は出エジプトのち荒野において仮屋に住んだ故事に因んで一週間、茅の廬に生活するという話から、現代の人生もまた茅廬のようであることを「何故人生は不定であるか、之は大問題である、イエスは惑へる靈に曝きて宣はく、心に憂ふる勿れ、神を信じ、我を信すべし、我父の家は永遠に変わらないと、イエス御自身を此世に於ては、枕する処なしと仰せになつた。永遠の靈を抱き給ふイエスが有限なる自然界と、靈化せられざる人情界に於て、其心の安息所を発見し給はざりしは当然の事である」と論じ、われわれもまた不変なる神を信すべきであると説いている。とくにユニークな思想がのべられているわけではないが、古代と現代をさだめなき人生において直結させたすぐれた説教である。なお、この説教はのち大正五年（一九一六年）四月二〇日の『基督教世界』に「茅廬の人生」という題で、内容も少し改められて掲載されている。このように『基督教世界』所収の米澤の説教には『神戸教会月報』に発表されたものの改稿が多い。

ちなみに神戸教会は明治二年（一八六九年）に渡来したアメリカン・ボード（米国伝道会社）派遣の宣教師D・C・

グリーンから明治七年（一八七四年）四月一九日に十一名の男女が受洗、グリーンを仮牧師として、当初、摂津第一神戸公会と称して発足したもので、横浜、東京について日本で三番目、組合教会では最初のプロテスタント教会である。その後、デビス、アッチンソンの仮牧師ののち松山高吉が初めて正牧師となり、ついで原田助、本間重慶、海老名弾正、再び原田助、渡瀬常吉が就任、米澤に引継がれたものである。なお米澤は赴任後八箇月は仮牧師であり、大正元年（一九一二年）四月に正牧師に就任した。¹⁶⁾ 会員数は米澤の赴任した年度の終り、すなわち明治四五年（一九一二年）三月末の統計で、男四二一名、女五八三名、計一、〇〇四名、内現住会員五六七名、他行会員四三七名である。礼拝出席者数は年間統計なく明治四五年四月の月間平均二三名、内男七九名、女一五二名である。年間經常収支は収入三、四五二円六一銭、支出三、四五一円二六銭五厘、次年度予算の内牧師報酬年間一、二〇〇円である。¹⁷⁾ これらの数字はこの教会が統計的にみて有数の大教会であることを示している。

米澤は組合教会の機関紙『基督教世界』にもしばしば寄稿しているが、その最初は大正二年（一九一三年）七月一日号である。そこには説教特集が組まれており、序文の一節に「今回特に我党の少壮教役者諸氏の教壇を紹介せるが、敢へて先輩後輩の別を立てんが為にはあらず、之によりて如何なる宗教的生命が若き牧師の衷に溢れ、如何なる宗教的思想が其間に流れつゝあるかを知らんと欲せるのみ」（傍点原文）とある。そして安部清藏、武本喜代藏、津荷輔、額賀鹿之助の説教とともに米澤の「未得の所有」が載せられている。

これは列王記上二二章三節をテキストにしたもので、ヨルダン川東の高地ラモテはイスラエルの領土であるのに、敵国スリヤに占領されているのを黙視している臣下の感慨のなさを王が慷慨する話から、「人生には之れと同様のことが甚だ多い。吾々の性格のうちには未だ達せられてない幾多の可能性がある。未発の現実がある。此天地には是非

とも吾々人間に依て所有せなければならぬ智識の領土がある。然るに現在は神妙の雲の裡に掩はれては在る。吾々により開拓せられねばならぬ社会、皆等しく未発未得のものとして存して在る」として、さらに靈的経験を未だ得ていない人の多いことを歎き、「神の国は汝らのうちに在るなり」とはわれわれの手の届く範囲内にあることを意味するとのべ、無自覚や怠慢を捨て、われキリストを得る、否キリストわれを捕えたりとの恩寵をわが所有となすべしと説いている。

この説教はすでに『神戸教会月報』の同年二月号に同じ題で発表されたものに若干加筆したものである。『基督教世界』の同年七月二四日号には前記説教特集の批評が「愛読の「信徒」の署名でなされており、米澤の説教に対してはつぎのようにのべて他の四篇の説教よりも高い評価を与えている。

「最後に米澤先生の『未得の所有』であるが自分は実に感服に堪へない。殊に列王記上二二章三節を引き旧領ラモテの回復に因んで人の靈性の自覚と向上の努力を奨励した所はどうしても教壇上の凡手にあらざることを示して居る。果して是れが先生自己の聖書研究の結果として此題が浮び、此思想が纏つたものとすれば、それは実にキャメル、モルガンやジョウエットと伍して少しも遜色なき非凡の説教家たる資格を有するものと言ふの外はない。唯少しく言ひ過ぎかはしらぬが殊によれば西洋の雑誌か説教集などを読むうちに偶然にかゝる思想に触れて其思ひ付を採用されたのではあるまいかとも思はれる。何かのホメリチックスにでも書いてありさうな気分がする。併し是は感服の余りの疑問であつて、よし暗示は他から得られたにしても、其内容は何処までも先生自らの思想に基くものと信ずるが故に、矢張結局熱心なる聖書研究の産物と見るが当然であらう。此説教は西洋の聴衆には非常にアップリシエートされるものであらう。ラモテは我所領なりとの自覚より説き及ぼして靈界の深き真理にまで導く所^よ殆ど理想的なる好説

教である」

ところでこの時代に文化的キリスト教の特色が米澤の説教によくあらわれているものとして大正八年（一九一九年）元旦に神戸教会で行なわれた神戸市内のプロテスタント諸教派の聯合祝賀式における「新年祝辞」をあげたい。『神戸教会月報』の同年一月号からの要約である。

欧州大戦が終つて五年、世界改造の第一歩は始つた。この自由と平和を永久に確信するために、われわれクリスチャンは新文明建設の先頭に立たねばならぬ。新文明とはなにか。第一に自由思想である。いわゆる民本主義であり、個人の尊厳と万人に平等の権利を与えるこの思想はますます發達するだろうが、神への信仰の上にこれを築きたい。第二は文化主義である。それは學術、芸術、宗教、道徳の力をもつて物質界、自然界を支配することである。物質文明を精神化し、機械文明を靈化するところに文化主義がある。第三に個人主義と団体主義の調和である。大戦前は個人主義が強く、戦後は団体主義が盛んになつたが、個性と人格を尊重する個人主義を団体的な社会生活の上に建てねばならぬ。第四は正義人道に対する信念である。英米の精神界は弛緩していたが軍国主義世界を覆うに至つてキリスト教的良心は覺醒された。この信念に立たずして新しき平和と文明はありえない。「此夜明けの幕を引く為めに、思想の人よ、行動の人よ、信仰の人よ、先立ち行きて黎明を呼び醒せよ」

これは説教であるだけでなく、文明批評であり、社会評論であり、米澤の特色が躍如としている。この論調を受けて今後のキリスト教のありかたを説き、とくに社会的キリスト教の時代に入つたことを宣言した文章がある。それは「文化的キリスト教から社会的キリスト教へ」というテーマが鮮明にされた最初といつてもよいだろう。『神戸教会月報』の大正九年（一九二〇年）一一月号に掲載された「基督教生活の態度」であるが、同趣旨を敷衍したものが、

『基督教世界』の同年十一月一日、一八日、一二月二日の各号に社説「改造されつゝある基督教」として連載されている。

どちらも「二十世紀は歴史の一大転機である。工業、政治、教育、芸術、宗教は根本より改造されつゝある」という書きだしで始まっている。そしてキリスト教は過去において三つの舞台をへてきたという。第一は初代のそれでイエスの人格と使命に共鳴した者が組織も儀式も教義もなく靈的生命に燃えて活動した。第二はカトリックの時代でローマ帝国の版図を越えて、ギリシヤの哲学やラテンの才能と結んで、組織、階級、儀式、伝説などの城郭を築いたが、それは進歩でも建設でもなかった。第三はプロテスタントの時代で民衆に聖書を提供したがしだいに教義的になった。カルビン主義は信条によって自由を奪い、清教主義は人性の自由を否定した。それはあまりに個人的で社会的興味をもつ現代人には不向きである。今日のキリスト教は第四の時代に入った。それは社会的キリスト教である。その現代にふさわしいキリスト者の生活態度はいかにあるべきか。第一に崇敬の態度であり、自然界に対し敬虔であるべきである。第二は善隣の態度であり、友愛の精神や社会正義が必要である。第三は信仰の態度であり、人生の冒険に身を投ぜしめるものは信仰であるという。

このような社会的キリスト教への傾斜は『基督教世界』の大正一〇年（一九二一年）一月二七日号の社説「奈良申合書の感想」にもよくあらわれている。同年同月奈良において行なわれた組合教会總會の申合書に関する論評であるが、そのなかで「特に人生の根本には、経済、産業、富の配分問題が存する。此問題につき教会は先づイエスの精神を学び、之を社会に与へねばならぬ。従来は余りにイエスを哲学神学の範囲で考へ過ぎた。併しよく見るに彼は社会的教師であつた。彼の衷には予言者の燃ゆる社会的使命に共鳴するものがあつた」とのべ、のちの「無産者イエス」

という思想の伏線があらわれている。

また組合教会全体が文化的キリスト教から社会的キリスト教へ向かうべきことを説いて「束縛、伝説、教権よりの解放と、思想の自由、良心の權威により、民衆的意識の上に深淵たる文化を営まんと志により、同志結束せしビルグリム・ファーズの精神は、間接直接に我教会のインスピレーションであつた。我先輩諸士の過去五十年間、自由民衆主義により奮闘せし偉業は、吾々の光榮とする処である。凡そ理想は体现を求める。強く人心を捉へたる大思想は、必ずや運動となり、新社会の組織原理とならんとした。吾々の宗教的理想たる『神の国』と云ふ名が、既に一の社会を暗示して居る。自ら發して一社会を作り、そこに信仰と生活とに於て、各自の協同的精神を實現せんとするに至るは明かな事である」といつている。

米澤は大正二年（一九一三年）一月から組合教会の理事に就任しており、さらに大正八年（一九一九年）一月からは『基督教世界』の主幹として社説も多く執筆していた。だからこれは米澤個人の考えではなく、それによって組合教会をリードしていた思想とみるべきであろう。

(15) 『神戸教会月報』明治四四年（一九一一年）一〇月号。

(16) 『神戸教会略年譜』昭和四九年（一九七四年）四月、日本基督教団神戸教会発行。

(17) 『神戸教会月報』明治四五年（一九一二年）五月号。

米澤は大正一〇年（一九二一年）四月から一年間、アメリカとヨーロッパの、主として宗教事情を見学するために神戸教会牧師在職のまま長期旅行を行なった。『神戸教会月報』同年二月号の「米澤牧師外遊」という記事には「我が敬愛する米澤牧師を教会に迎へて此に十年、教会は益々新時代の劈頭に掉して理想実現の壮図に苦闘健闘を続けて居る、さりながら我等は教会史上に一時期を劃すべき創立五十年の記念の日を僅に三年の目近に迎へた。其日に更に大なる栄光ある神殿を神の為、人の為、社会の為に捧げて勇奮しなければならぬ。此の喜ばしい光栄の日を迎へるまでに我が敬愛する米澤牧師を先づ広く海外に迄遣り得る事を欣ぶものである」とあり、さらに旅費六、〇〇〇円を贈るべく募金すると記されている。教会から牧師を一年間、しかも十分な旅費を支出して外遊させるということは當時に限らず、稀なことであり、米澤に対する教会員の信頼と期待の大きさを物語っている。

米澤は同年四月一日、横浜を出航し、途中ハワイに寄港してサンフランシスコに着き、バークレー神学校、スタンフォード大学、カリフォルニア大学などを見学、ロサンジュルスで開かれた米国会衆派教会大会に出席した。さらにシカゴ大学、オベリン大学、工場街を訪れ、ニューヨーク、ワシントン、ボストンを見て、ハーバード大学やコンコードを尋ねた。一月に大西洋を渡ってロンドンに着き、ウエストミンスター教会や大英博物館を訪問、パリに行き、またロンドンに戻り、年を越してオックスフォード大学やシェイクスピアの生地遊び、ドイツに渡り、ジュネーブからロンドンに帰り、大西洋、地中海をへて大正一一年（一九二二年）三月一日に神戸に帰着した。

その間の消息は「欧米漫遊通信」または「欧米漫遊記」と題して『神戸教会月報』の毎月の紙面を賑わせており、

『基督教世界』にもしばしば同様の紀行文を寄せた。そのなかから二箇所を引用しよう。米澤は米国会衆派教会大会の社会奉仕の集會に出席して演説し、「米国会衆派教会と我組合教会は特別な關係を有して居る故に我組合教会が現代の日本及東洋に対し使命を感じる問題は亦諸君の問題である。諸君の問題は亦我々の問題である。と云ふ前提から、戦後日本の經濟、産業、思想、外交の事情を述べ、混沌たる社会をキリストの王国たらしむる根本は基督の人格と其教派である。今日新らしくなりつゝある日本は官僚主義、軍国主義と戦ふて居る。我等の要求するものは大なる金か、兵力か、否神とキリストの力である。協力此の使命を尽したしと云ふ筋にて約十三分間述べた」といふ。

またロンドンのウェストミンスター教会を訪れた時の感想として「あゝウェストミンスターの墓地、人間の權威の始めと終りの標本、王座は相去る一步である。此寺院は英国人に此世の權を慕はしむる力があるか將又いとほしむるか。私は米國に於ける巡礼祖先や、コンコルド墓の如き神聖と靈感を与へられない。ここには人活きず。彼等は寧ろ現代の大英國民の中に活きて居るであらう。イエスはパレスチーナに非ずして、現代文化の中に博愛犧牲の精神となつて活き給ふを信ずる心が一層強くなる」とのべている。

米澤は帰朝の翌日、日曜日の「歓迎全員礼拝」において「世界平和の確立」と題する説教を行なつた。その記録は残っていないが、いかにも世界大戦後、恒久の平和を願う世界を巡つた新帰朝者らしい雄大な主題である。

本稿はおもに米澤の思想を論じているのだが、思想と無縁ではない米澤の人物についてもここで触れておきたい。さきに引用した『基督教世界』の追悼特集の西内藤男と中村三郎による感想の他の部分を引用すると、西内は「併しその性格には狷介な処もあり、直情径行の処もあり、一面仲々むつかしい点があると共に非常に優しい処があつたやうです。慰勞の意味で浪曲でも劇でも第一人者が神戸にすれば財布をはたいて案内せられました。又時々喫茶店など

に案内せられました。そしてほがらかに談論せられました。神学の思想は勿論自由主義でありました」とよくその人を活写している。米澤の神学思想は進歩的であったが、その説教は雄弁で靈感に溢れたものであったという。

また中村は始めて米澤に会った時のことを記し、「これが正式な米澤先生との初対面であった。何かと話してゐると自分は近江人だと仰つたので、僕は近江人は余り賢明過ぎるので嫌ひだとアッサリやつてのけると先生は「君はえらいズケズケとものを云ふ人やなあ」と云はれ、そんな事から神戸教会の伝道師として先生を助ける事になつた。

僕の渡米に関しても種々お骨折を蒙つたが愈々お別れも近くなつたので先生を吉衛門の『柿右衛門』に案内した処、氣に入つて『柿右衛門』を三日が二日続けて観劇に行かれた相であつた」とこれも米澤の一面をよく描いている。いずれも米澤の外遊の前後に伝道師として米澤を輔けた人であり、この時期が米澤の生涯においてもっとも華かな時代であつた。

ついでに米澤の長男理一氏の筆者宛の書簡^(註)を引用すると、「一口で申しますと父は抹香臭さのみじんもない僧侶、墨染の衣の下に常にタキシードを着込んだ宗教家であつたと申せましょう。西欧哲学を繙く傍ら、深山の仙閣に高僧を訪ねて東洋哲学を究めつつバイブルを講じた父。美術を觀賞し、文学・芸術を理解し、教会の教壇に立つては娘義太夫や歌舞伎を通して神を説き、又大佛次郎氏著『赤穂浪士』を読んで上杉財閥とプロレタリア赤穂浪士の血みどろな闘争を見出し、或はアメリカンフットボールの雄壮を語り、鳴尾競馬場に出かけては英国紳士然として馬券など見向きもせず競走馬の雄姿に見入るなど、およそ牧師としての父というよりも、古きを忘れず、象牙の塔に閉じこもることなく、常に新しきを求める進歩的哲人であつたと存じます」とある。

また神戸教会赴任当初はピューリタンの厳しい父親であつたが、外遊から帰つてのちは「ピンク地にブルーの縞

柄のワイシャツ。コダックを掲げての散歩姿。木曜日の昼時ユニオンチャーチでのヌーンサービスではオフィス街の青年達の間にも新風を捲き起し、宗教的名映画（天路歷程や小公子）をとり寄せて映画会を催し、自ら弁士をかい、或は宝塚少女歌劇を招いてY.M.C.A.のホールを立錐の余地無きまでに埋め、教会がただに喜捨をたのむのではなく教会員自らが努力して基金を産み出すことに心がけていました。教会のバザーにしても、ただ教会員の寄付による品物の販売のみでなく、遠く瀬戸まで出かけて大量の瀬戸物を仕入れてこれを市価より遥かに廉価で販売して大いに利益を上げるなど、近江商人の片鱗を教会の事業に表わした事など、父は事業家であり政治家でもあったと云えます」として、当時の教会員の協力なくして米澤の活動はありえなかつたと感謝をのべている。

その頃の米澤の思想はもとよりデモクラシーに賛成し、すでに相当、社会的キリスト教に傾斜していたが、しかし民主主義や社会主義では解決できない問題のあることもまた指摘している。たとえば大正一四年（一九二五年）二月『神戸教会月報』に掲載された説教「民衆線を破りて」はルカ伝二三章三三節をテキストにして、「デモクラシーに對する充分なる理解なきため、多数が正義であると云ふ先入観から独裁を多数に代へる、多数一般の考に膝を屈めると云ふ傾向が現在のそれである。併し多数一般の考が不正なこともある。『民衆の聲が神の聲である』などは無意義である」から始つて、多数者が組織された民衆の水準、すなわち民衆線にまで下ることがよいとはいえないと説く。そしてイエスは「神から民衆線に下りるよりも民衆線を破つて、十字架を受けることを決せられた。現代の文化も、何も、更に民衆線を破つて上る大きな力がなくしては靈がない。救がない」と結んでいる。これは米澤の思想が時流に投ずるだけのものではないことをあらわしている。

この時代の米澤の活動として特筆されるべきものはヌーン・サーヴィスの創始である。これは正午礼拝とも呼ば

れ、週日の昼休みに会社や官庁に勤める人々を対象にして市中の教会で行う短い礼拝をいう。ヒントになったのはさきのニューヨークでの見聞である。「欧米漫遊通信」の一節に「此処（ウォール街）の正面に三一教会堂が厳然として空に聳える。古色蒼然、石造ゴシックの会堂は恰も巨人の如く、神人の如く、時々鳴り渡る尖塔の鐘の響を以て幾十百万の靈魂を呼び醒しつゝある。正午から一時までの礼拝には一攫千金を争ふ男女の多数が膝つき祈をこめつゝある。彼等はクワイヤの聖歌に恍惚として神秘の境に憩ひ、壇上の光を凝視しては生命の光を仰いでゐる」とある。

最初のヌーン・サーヴィスはこの年の一月二八日、木曜日の午後零時半から三〇分間、神戸のビジネスセンター明石町にあったユニオン・チャーチ（外人合同教会）を会場にして行なわれた。米澤はヨハネ伝一章九節―一三節を読んで、「人間が人間に対する態度に三種の型がある。第一は接する人から何を得ることが出来やうかと考へる態度、第二は人間を見るに現在あるまゝの彼れ以外に彼を知り得ず、其の職業、地位などを以て人に接する態度、第三は第二の如く人を只平面的に見ず立体的に見る態度である。即ち如何なるものが此の人の生活の中から作り上げらるゝかを見て希望を以てする態度である」といつてキリスト教的人間観を語った。この日から毎週木曜日に行なわれたが、毎回二〇〇名以上が集り、そのなかから神戸教会に出席し、受洗する者も出た。そして会場が譲渡による取壊しのため使えなくなる昭和二年（一九二七年）一二月一日まで続いた。またその年の六月から毎火曜日の夜、参加者の有志が牧師宅に集つて宗教座談会を開き、思想や文学についても自由に論じあつた。

このヌーン・サーヴィスは日本最初のもので、のちに東京や大阪でも行なわれるようになったが、米澤の創見が発揮された企画であり、都市の市民層への伝道として適切であつた。米澤は大正というデモクラティックで文化的な時代に見合つていたと同時に、神戸という近代的な港町の風土にふさわしい人物であつたといえよう。大正一三年（一九

二四年) 四月に神戸教会は創立五〇年の記念集会を行なったが、兵庫県知事と神戸市長が出席して祝辞をのべたことも、神戸教会と地域社会との結びつきを示す一例である。

しかし米澤の内部には古い思想も残存していた。それは天皇に対する考えに端的にあらわされている。明治天皇の死に際しても、そうであったが、民主的で社会的なキリスト教を主張していた大正時代の終りに天皇の死を迎えた時に米澤があらわした天皇観はそれらの思想と矛盾する時代錯誤的なものである。市内各教会聯合奉悼式が神戸教会で開かれた際に米澤が朗読した「奉悼之辞」は大時代的な修辞とキリスト教への牽強附会が多く、美文であるだけに異和感が増幅されている。たとえば「遂に廿五日午前一時二十五分、クリスマスの明星は雪に蓋はれた葉山の空に輝く折、神々しく英霊雄魂、永へに神去り給ふた」「誠に悲しくも神々しく我等キリスト教徒の一入に神秘の感に堪えざらしむる次第である」「申すも恐多きことながら陛下には御即位以来『自己の為め生き給はぬ』基督教的王者としての理想を御実現遊ばしたのである」「昭和元年十二月二十六日 草莽の臣 尚三謹白²³⁾」といった調子である。

米澤は昭和三年(一九二八年)二月五日の礼拝を最後に神戸教会牧師を辞任する。その間の消息として『神戸教会月報』同年二月号は牧師辞任を議する臨時総会の席で執事森田金藏がのべた説明を載せ、米澤の言として「思想上の問題も取纏めたいし、著述もして見たいし、静養もしたいので、此際是非辞任させて貰ひ度い」との固い申出があり諒承せざるを得ないとしている。『神戸教会月報』に載ったなかでの最後の説教は昭和三年一月号の「次の一步を念頭に」である。

それは「トルストイが人生問題に逢着してかの大いなる煩悶に陥つたのは彼が五十歳の時であつた」から始めて、「彼は曰く『余は今家富み名揚がり成功の絶頂に達せり、然も是れ何の意義ぞ、次は即ち如何』と、彼は愕然として

人生の空虚を語つた」とのべ、「嗚呼、『次は何ぞや』。吾人をして静かに厳かに自問自答せしめよ。此の間を自らに発し得ざる者は固より不幸である。されど此の間に対して解答を与へ得ざる者は更に不幸である」と結んでいる。辞任を前にした米澤の心境がよくあらわれている。

(18) 『神戸教会月報』大正一〇年(一九二一年)九月号。

(19) 『神戸教会月報』大正一〇年(一九二二年)四月号。

(20) 昭和四九年(一九七四年)八月二日付。

(21) 『神戸教会月報』大正一〇年(一九二一年)一月号。

(22) 『基督教世界』大正一五年二月四日号。

(23) 『神戸教会月報』昭和二年(一九二七年)一月号。

四

米澤は神戸教会を辞任したが、しばらく神戸に居住して各地の伝道の応援や前記宗教座談会を続け、やがて一冊の著書をあらわす。それは昭和三年(一九二九年)九月に春秋社から刊行された『無産者イエス』である。米澤は「無産者イエス」といった表現をそれまでも用いることはあったが、著書の表題とするというのはかなり思いきつた行為である。神戸教会を辞したという解放感と切迫感の混淆が、このような大胆なタイトルを選ばせたのだろうか。著者の「序」によると外遊中、オペリン大学において神学者ボスウオスとイエス伝について語りあった際、見逃がせぬ一書として示されたのが、ポウク・ホワイトの『大イイエスは何を叫びつゝあるのか』(“The Call of the Carpenter”)であったという。そしてヨーロッパへ向う船中でこの本を読んだ。

「現生活を離れて神秘の境に浸たり抹香臭く、キリストを描いて、之を念じ、高い処から、声を囁らして、民衆に

叫むだ過去の生活から目醒めた私には、煤煙と機械の響きの中に、悩ましい生活の戦ひの中に、人類解放の指導者なるイエスを之れから研究せねばならぬ。又それを大胆に説かねばならぬことを深く感ぜしめられた」⁽²⁴⁾「しかし本書は、ホワイトの著書の翻訳ではない。大体は同書によつたが、私自らの研究する処により、をこがましくも、私の著書として公にすることにした。ラウゼンブッシュの『社会的キリスト教』の三著、ソーアスの『社会組織と聖書の理想』、エルウッドの『宗教改造論』は特に参考書とした。しかしホワイトの精神が全篇を蔽ふてゐることは言ふまでもない」⁽²⁵⁾

この本の梗概ともいうべきものが『基督教世界』の昭和三年四月五日、一二日、一九日、二六日、五月三日、一〇日、一七日、二四日、三一日、六月七日の各号に連載されており、すべて「大工イエスの……」という題がつけられている。これはイエスがもとは大工であり、のちにも無産者であつたことを強調して史的イエス像を社会的視角から物語風に描いたものである。『無産者イエス』のなかから二、三の箇所を引用しておこう。

「彼〔保羅〕は羅馬の物質的偉大と云ふ影の下に物語つた。大建築、大なる競技、軍隊的訓練、などが話の譬となつてゐる。彼は人間は政治的義務ありとして無産者に語つた。イエスは、それよりも人間尊重の福音を主題とした。保羅の主要なる道義は、服従に在つた」⁽²⁶⁾「今日の教会は社会的感情に燃やされてゐる。教会に礼拝する人と労働者との深淵が益々大きくなりつゝある。それは神学と信仰の根底に専制的神を措くからである。神そのものゝ内容にデモクラチックなものがなくなつたからである」⁽²⁷⁾「現代人は唯一事を教会に求める。夫れは会堂の中から偶像と虚飾の取り去られんことである。大胆に無産者イエスを語ることである。するならば、民衆は潮の如く、教壇の下に寄せ来るであらう。教会が大工イエスに改宗することを世界は俟つてゐる。既に世界の大勢はイエスのデモクラシイに帰つてゐる

る。教会はいつまで彼を離れ居るのであらうか」⁽²⁸⁾

このような考えは当時の社会的キリスト教のなかでも急進的な思想である。これを当時すでに日本のキリスト教界に紹介されつつあった新しい正統主義であるカール・バルトの弁証法神学にくらべるなら両極といふべきであろう。キリスト教は単純化すればイエスをキリストとする思想であるが、そのうちキリストを重視するのが正統主義、イエスに重点を置くのが自由主義といつてよいだろう。教義としてのキリストか、歴史としてのイエスかはキリスト教史の永遠の課題であるが、米澤は神戸教会辞任後、一気に歴史としてのイエスに向かつて、その思想を追いつめていたのである。

今日のイエスに関する史的研究所の水準から見れば、この書は当然、低いところにある、また聖書学の専門的探究でもない。しかし、その社会思想的応用として当時のもっとも進んだ立場にあった。無産階級の味方と考えるところから、イエスをいわば革命家とする立場が当時もあつたけれど、米澤は大工イエス、人間イエスにこそ神があらわされているという信仰を堅持していた。また今日、キリスト教を脱出し、止揚することによってイエスをあらわし、イエスにかかわろうとする、たとえば晩年の赤岩栄のような主張もあるが、米澤のそれはキリスト教の変革ではあつても止揚にまでは至っていなかった。なお、この本はホワイトの著を下敷きになっているのはやむを得ないとしても、表現に粗雑なところがあり、誤植も多く、米澤の唯一の著書としては残念なものである。

米澤は神戸教会時代から人間の苦悩について語ることがしばしばあつた。そのような人間存在についてのネガティブな認識は人間イエスを語るときにも、それを楽天的な思想にしないだけの重みがあつた。神戸教会辞任後、なお神戸に留つていた昭和四年（一九二九年）三月二〇日の『大阪毎日新聞』朝刊に寄稿した「苦悩を擲まんとする本能」

はその一例である。

「人生の苦難や社会の不幸を慰藉し、これを救済しようとする企図は美はしいことであるが苦難を擱んで絶えず価値を創造せんとする衝動本能を殺してはならぬ。社会政策が人間の本质と文化の根本義において多く失敗に帰した理由はこゝにある」 「マルクスは経済を至高の帝位においた。自来経済問題の解決が総ての問題の解決を意味するやうになつた。しかしこれがすべてであらうか。資本主義が全廃され富が平等に分配されたならば、それで人間は理想の社会を完成し得るであらうか」 「安逸道の発見のために聖書を読んでならぬ。救ひは危険を犯して進む者への約束である。バイブルの宗教は嶮山を攀ちて生命を提供する。キリストは『狭き門より入れよ』と挑戦した。然るに近代の宗教を求むる者は広き門から入り、遂には人間としての生命を盛るべき内容を失ふた。宗教の危機はこゝにある」

これは『無産者イエス』を執筆している頃の思想である。ここには苦悩の人間における積極的意味が説かれており、「無産者イエス」といった表現から人々が受けとりがちに誤解を訂正するに足るものが籠められている。神戸教会牧師を辞して野にある宗教家として、著述家として自立しようとしていた米澤には苦悩があった。しかし、その苦悩がおそらく米澤の全生涯においてもっとも深い思想を産み出しつつあった。米澤は続いて昭和七年（一九三三年）の一月に万国共励会会頭であったダン・ポウリングの著書を翻訳し、『渦巻く波止場』と題して警醒社から出版したがこれは筆者未見であるので論評を控えたい。

神戸に居住して、しばしば上京していた米澤はやがて家族とともに牛込富久町に居を構え、（一九三三年）昭和八年一〇月からそこで日曜日に集会を行なつた。その頃の感想として「私は求めらるゝがままに到る処に一小集会を開き、共に聖書を学び、共に祈り、又夜遅くまで信仰問題を談ずることにしてゐる。各所に小細胞を作ると云ふのが私

の願である。私は目に見えぬ教会を持ち、其の教会の牧師伝道師だと云ふ考、喜、又責任の感が一日々々と加はつて来る。神は私に大きいパリッシュ〔教区〕を与えて下さったのである」と書いている。

東京に居を移した米澤は同時に労働教会の指導に当ることになった。労働教会は大正八年（一九一九年）六月に労働者のサークルがつくった教会で、会堂を持たず工場や家族で集会を開き、礼拝や聖書研究をしていた。米澤が担当するようになった頃は使命社と共栄社という結社があり、日常は会社として前者は山手の東北沢で印刷業を営み、後者は下町の美倉橋でメタル類を製造販売していた。昭和九年（一九三四年）九月に創刊された謄写印刷の『労働教会会報』によると、米澤宅の日曜集會が労働教会の日曜礼拝であり、ほかに毎土曜日に土曜集會、水曜日に聖書研究会が行なわれていた。

「無産者イエス」という考えからいえば労働教会こそ、それをアピールするのにもっともふさわしい場所であるはずである。しかし米澤の信仰と思想は労働者を対象としながら、かえって後退し、内向していった。その間の事情の一端は前記『基督教世界』の追悼特集の山口金作の文章に触れているので前後するところもあるが引用するところ「ところが洋行より帰られた後、君は教界の現状にあきたらず、新生面を開かんとしてあせり過ぎたところがあった、其れで『無産者イエス』の訳書を公にすると共に所謂『象牙の塔』を出で単身社会に出られた、而してキリスト教会運動の一闘士として一旗挙げんとせられたが、事志と違ひ、君を助けんとした有志もあつたが力及ばず、君は一時失敗の身となられたらしいが、しかし君は終始伝道のことを忘れず、東京に移られてからも単独に或労働者間に伝道し、病床についてからも、其人々を日曜日毎に其周囲に呼んで聖書を講じてをられた」とある。

『労働教会会報』には使命社や共栄社に働く人々の文章が多く載っている。『神戸教会月報』には教会員の文章が少

かったのに較べると、労働教会は会員中心の教会といふことができるだろう。たとえば林久一は「イエス」と題して「要はイエスに触れることである。人間として生き、人間として労働し、人間として悲しみ喜ぶことである。それだけがイエスに会はしむる狭い通路である。それだけが救ひに至らしめる道である。そしてその後一切のもの、宗教も神学も哲学も、芸術も生きて来る。労働教会と云ふ名を僕が好むのは端的にこのことを指し示すが故であり、又そこに群る人達が学者ではなく、その日その日を苦しい労働に過す人々であるが故である。光はかうした教会から生れてこねばならない」などと書いている。従来米澤の主張の影響が地に着いた形であられたものといつてよいだろう。

しかし、この会報に載っている当の米澤の文章は神戸時代とはかなり異なっており、米澤の思想の最後の、そして後向きの展開があらわれている。そこには今まで見られなかったような伝統主義的な思想がのべられている。一つはパウロへの接近である。『労働教会会報』の昭和九年（一九三四年）一月号に載った「聖書の研究」は「羅馬書の研究をすることにした。私は過去三十年の間にこの書の研究や講義をした事は幾度もあつた。しかも自分は不満足であつた。多分聴いた人達も同様であつたに違いない。それに又この難物に当らんとした。自分ながら不思議に思ふ。愈々読み初めると、全く別天地に這入つたやうに感ぜられる」に始まり、「私は今この書に依つて救はれている。新らしき神の力を体験している『十字架による罪の贖』之を自分の標的として生きて往く。研究を共にする兄弟達も同じ考へを持つてゐると信じてゐる」と結んでいる。『無産者イエス』であれだけパウロを批判した同じ著者の変貌といわざるを得ない。そのことは米澤の次女の夫である井伊玄太郎氏が前記『基督教世界』の追悼特集に「米澤牧師の死とパウロ伝」と題して、病の重くなつた頃に米澤はパウロの生涯にわたる苦惱、その「刺」とのたたかきを実感をもつて味わたつたと語り、「パウロ伝」の研究をするよう井伊氏に頼んだという話を書いているところからも窺われ

る。

もう一つは旧約聖書への回帰である。『労働教会会報』の昭和一〇年（一九三五年）十一月十四日「夜半」という文章があり、「ヨブ記の講義を東北沢と美倉橋ですることとなり、人間苦の只中から神の摂理を仰ぐ靈の最高記録を森嚴なる思を以て一句一句辿り、一合目、二合目と攀ぢ、險崖を越え、急浅を渡る折柄、私は俄然病臥し、諸君と共に精進のハイキングを一時休息することとなりました」とか、「私は開巻第一章『エホバは与へ、エホバは取り給ふ。エホバの名は讃むべきかな』の一合目をどんな考へで過ぎましたか。私に健康を与へ給ひし神は又私の健康をお取りになる神であります。この体験がなくして一氣呵勢イッキカセに攀ぢんとした浅間しき、輕薄さ、傲慢さを神にお詫びしました」といつている。さきに小論の「序」において晩年の著述は「内容の思想性を問題にするなら衰退といわざるを得ない」とのべたのは、これらの文章にあらわされているものが伝統的思想への追隨であつて、作者の創造的思考ではないと思われるからである。

米澤の葬儀の際、組合教会を代表して弔詞をのべた額賀鹿之助は、そのなかで死の二箇月前に見舞つた時に聞いた言葉を紹介している。それは「僕は唯感謝に溢れてゐる。神様が愛であることが今漸く分つた、幾度か神に背いて折角刻印を捺して頂きながらもそれをどこかへ落してしまつた。今度の刻印こそ本当の刻印だよ、此愛の刻印はもう決して失はない。併しこの間までは未だどうも不安な気がして寝られないで考へたことも屢々あつた、或夜あのピリピ書第一章二十一『我に取りて生くるはキリストなり死ぬるも亦益なり』との言葉を示されて俄然として心が開けて僕は余りの嬉しさに衰へたる身体で思はず床の上に立ち上つたのですよ、聖書は神の言である。今まで人間の智慧や学問で誇りの心があつたために其真理が分らなかつた僕は、あの詩篇第二十三篇を読んで『我酒杯は溢るゝなり』とある

所を『我酒杯は破れたり』と曰ひたい程に思つてゐる。余り神様の恩寵が一杯で我が此の身体は破れたのですよ。唯々感謝のほかはありません⁽²⁴⁾」(傍点原文)という。

ここにもパウロと旧約聖書が引用されているがイエスは出てこない。この米澤の神への復帰を額賀は当然よしとしている。しかし病いの床にある米澤の胸中に浮んだのは、このような神への感謝ばかりではなかった。三女渡邊勝子氏から聴いたところでは最晩年、しきりに孤独感を訴えて、「狐は穴あり空の鳥は時あり、然れど人の子は枕する所なし⁽²⁵⁾」といっていたという。さきに引用した長男理一氏の書簡によれば、病気がいよいよ篤くなった時、「未だ死にたくない」と寂しく語ったという。米澤にとつて、これらもまた真実の声であつただろう。病名は胃癌、死は昭和一年(一九三六年)五月六日の午前零時五五分であつた。

「文化的キリスト教から社会的キリスト教へ」という思想の展開をその時代と状況のなかで遂げてきた米澤は最後に正統的信仰に行き着いたかに見える。しかし人間にとつて信仰とはなにか、思想とはなにか、そして真実とはなにか——米澤尚三はなによりもこの重大な問題を大胆に試行錯誤しつつ、生涯をかけてわれわれに呈示してくれたのである。

(24) 米澤尚三著『無産者イエス』昭和三年(一九二八年)九月、春秋社発行、四ページ。

(25) 前掲書、五ページ。

(26) 前掲書、一三九—一四〇ページ。

(27) 前掲書、一六三ページ。

(28) 前掲書、一八七—一八八ページ。

付記

- (29) 『勝利の声——米澤尚三遺稿集』昭和十三年（一九三八年）五月、労働教会発行、一七ページ。
(30) 『労働教会会報』昭和九年（一九三四年）二月号。
(31) 『基督教世界』昭和十一年（一九三六年）五月一四号。
(32) 『新約聖書』マタイ伝八章二〇節。

資料の借覧や聴取に際していただいた遺族の故渡邊勝子氏、米澤理一氏、親族の小野義夫氏、資料を閲覧させていただいた日本基督教団神戸教会の岩井健作氏、山口収氏に感謝する。